

小田原宿感応寺の行方

— 調査ノートより —

近 藤 文 隆

はじめに

小田原宿感応寺は、享祿四（一五三二）年の創建と伝えられている。（法華宗年表）

現在、この感応寺は法華宗に存在しないが、秋田県能代市感応寺は小田原宿感応寺の系統を継いでいると伝承され、法華宗年表にもそのことが記載されている。

能代市の感応寺が小田原宿の感応寺を継承しているという事由、また由緒関係を調べることに、現任職近藤日旺（文祐）は強い関心を持っていた。が、少年の頃（戦争前か？）秋田県本荘市大法寺先住、故田中隆雄師から宝塔山感応寺（小田原）の過去帳を受けてより、能代市感応寺住職就任後、また戦中戦後そして能代市第二次大火（昭和三十一年）の同寺類焼などで、小田原宿感応寺を調べる余裕のないまま今日に至ってしまった。

能代市感応寺の本堂に、一枚の絵図（模写）が掛けられてある。以前、感応寺現任職が小田原城を訪れた折、展示されてある何枚かの絵図の中から、偶然「感応寺」の名称を発見し、「これが感応寺か」と驚いたことを後年語っている。この名称をすぐに小田原宿感応寺と結びつけることは早計であろうが、何かしらの期待を持たせる発見であっ

小田原宿感応寺の行方

た。

本稿の著者もまた、この影響をまぬがれぬところであるが、やはりこの目で確かめて実証性を高めねばならぬと思
い、昭和六十三年ごろ小田原市を訪ねることにしたのである。当時、著書の見た小田原城内の三枚の絵図には、い
れも小田原宿南東の方向に「感応寺」の名称を確認できる。短かい時間の中、製作年次を書き込んで、今後の調査の
方法を考えた。

したがって、本稿ではいままでの調査資料を整理する程度にとどめ、まとめたものを次のステップへの橋掛りとし
たい。

小田原城絵図

小田原城は、JR小田原駅から歩いてわずか十分たらずのところにある。小田原宿感応寺の調査を思い立った著者
は、昭和六十三年五月小田原を訪ねた。同駅から右手の線路方向に進み、商店街に沿って初めての信号のある交差点
をもう一度右方向に向き変えるとめざす小田原城がある。坂を上りながら松木の乱立する公園を過ぎると、大きな石
垣が目の前にせまってくる。その石垣に手を触れながら歩いていると、急に視界が広がると共に甲高い子供たちの声
が聞こえてきた。そして、ハトのざわめきとたくさん動物たちの鳴き声とが一緒になって、およそお城の風景とは
につかわぬ光景に少々驚きの色をかくすことができなかった。

天守閣と思われる建物に入り、著者は早速めざす展示物をさがすことにした。目的はもちろん「小田原宿感応寺」
記載の絵図を見るためである。

秋田県能代市感応寺の本堂には、住職が模写した図が掲げられてあるが、それには「万延・庚申図」（一八六〇）と記されており、添え書には、

「道中奉行 山口丹守様御絵図方渡辺 前田氏行製之 町年寄什」

とある。この絵図を見ると、天神（てんじん）小路、御厩（おうまや）小路が山角町（やまかくちょう）から南の方角に細く進み、その御厩小路の東側に「感応寺」の所在が確認できる。しかし、この段階ではまだ、絵図からの所在地と、これからいよいよ発見される所在地との付合確認はできていなかった。御厩小路に面した感応寺の存在が気にかかると同時に、「もうまちがいあるまい」と自分を納得させながら、他の絵図を見ると、「寛文、延宝図」（寛文一六六一〜七二）（延宝一六七三〜八〇）と、「嘉永図」（嘉永一八四八〜五三）の二軸にも、感応寺の名が記載されていることがわかる。感応寺住職がかつて見た絵図は「万延・庚申図」であったが、いまから三十数年前に見た段階では、「寛文・延宝図」あるいは「嘉永図」はまだ展示されていなかったのであろうか。

御厩小路は「小田原資料」から、

「江戸期から明治八年前まで、江戸期は小田原城下の武家町、明治四年からは小田原駅を冠称、東海道沿いの町人町、山角町から南折する熱海道沿いに位置する。」

稲葉氏藩主時代の小田原城を描く寛文・延宝図には、当時南端西に下馬屋が見える（小田原城天守閣蔵）町名はこれに由来する」

とあり、この嘉永図では、御厩付近には足軽長屋があり、三十石層の家臣が住んだという。又、山角町近くに三十石〜三四〇石の家臣が住したとも伝えられている。

「西海子（さいかち）との境に、幕末の国学者、吉岡信之邸があった」

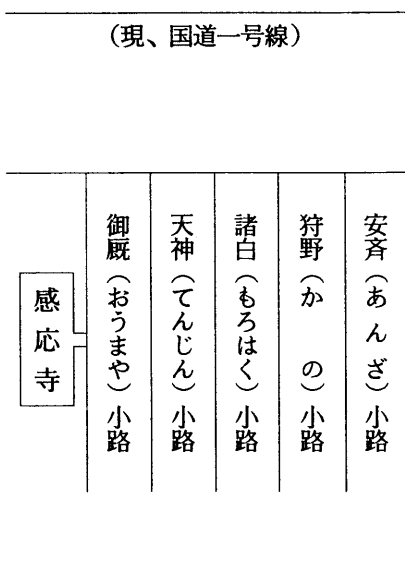
小田原宿感応寺の行方

小田原宿感応寺の行方

と紹介されてあるが、この御厩小路付近を小田原市教育委員会の史跡案内板から転載する。

実はこの地域は、小田原城構築上、重要な外部の役目を負っていたのだが、感応寺跡地発見が、小田原城外部の見

西



東

学から偶然結びついたことを付記しておきたい。

いずれにせよ、城内三絵図の同方角に感応寺の名を見つけることができることから、小田原宿に感応寺が存在したことはまちがいあるまい。そして、今度は実際にその場所を確かめるために、著者は城を出た。

小田原城早川口遺構

小田原城を出た著者は、タクシーで元感応寺跡地をさがすことにした。しかし、駅前で買った小田原市地図ではどうもたよりない。そこで、著者は運転手に話して、まず方向的に見ても同じと見られる「小田原城早川口遺構」を見物することにした。この早川口遺構は小田原市南町四丁目にあるのだが、この時タクシーは南町三丁目の方から入ったらしく、小路小路と回っているうちに、とうとう目的地は皆目わからなくなってしまった。そこで著者はタクシーを降りて歩くことにした。曲りくねった小道を歩くうちに、幅一、二メートルぐらいの疎水路にぶつかった。このながれはとて澄んでいて、これもあとから調べてわかったことであるが、この疎水はむかし山角町の住人たちが、元和年中（一六一五）新たに開墾して山角町住人持ちの飛地に必要とした水路のなごりらしい。よく見るとこの疎水路に沿って石を積んだ土手の様な場所が目に入った。そして、流れを上ぼる様に進んでいるうちに、その土手の上に「小田原城遺構早川口」と刻まれた標柱を見つけた。著者は、どうも裏手の方よりこの遺構跡地に入ってきたらしい。その場所から周囲を見わたすと、なる程、戦構えの雰囲気がないわけでもない。「あっ！ここだな」と見ながら、中に入ってみると、回わりは五十センチぐらいの雑草が密生し、「遺跡」としての整備をしている様なふしは見られなかった。そのヤブの中に一枚の掲示板が立てられていて、「早川口遺構」という文字が目に入る瞬間、まさに一メートルも離れていないところに「元小田原感応寺跡地」と書かれた、そう高さ一、五メートルぐらいの白い標柱を見つけて、著者は唸った。

いままで機会がなかったとはいえ、これほどまでに簡単に見つかる何んという偶然であろうか。これもあとの調

小田原宿感応寺の行方

查でわかったことであるが、この感応寺跡地標柱発見の数年前に、小田原市教育委員会がすでに元感応寺跡地発掘調査を終えていたというから二重の驚きである。当然、この時点で著者は同市教育委員会の発掘調査のことは知らなかった。この早川口と御厩小路との関連もいま少しわかりにくかった。いずれ、この早川口遺構の隣接地に元感応寺跡地があったであろう、と考えて遺構正面入口から逆に出ると、そこは国道一号線が走っていた。

この早川口遺構については、小田原教育委員会の遺構内掲示板に詳しく紹介されているので、そのまま転載する。

「史跡 小田原城早川口遺構」

(昭和五十二年五月四日 国指定)

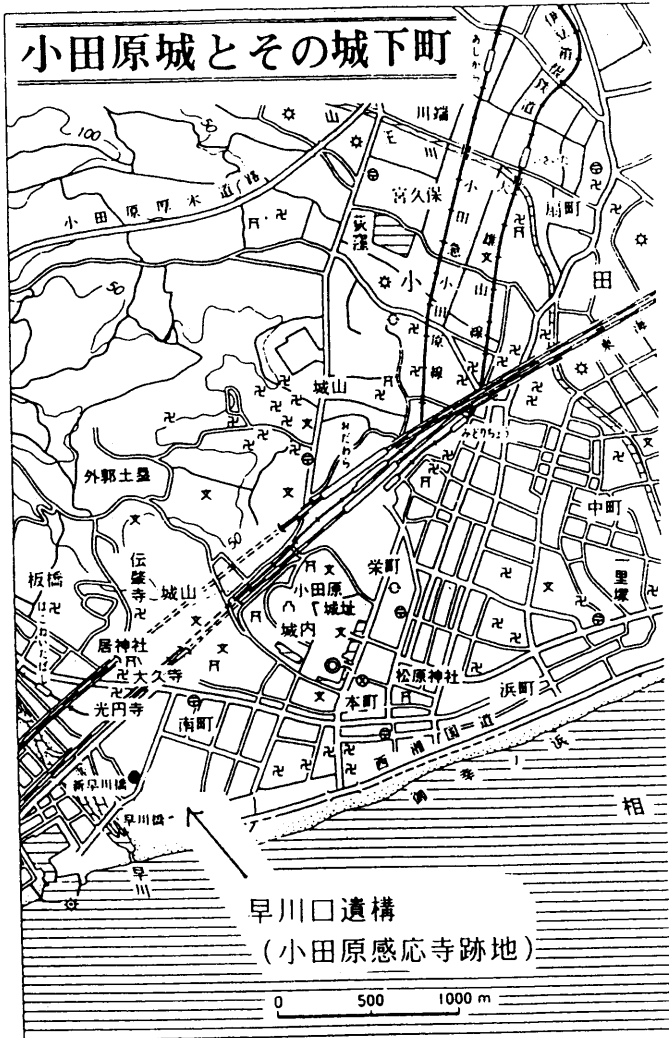
小田原北条氏の時代の小田原は、全国屈指の雄大な規模を持った城郭として知られています。

その構築法は内郭(本丸、二の丸、三の丸)や城下町の周囲に大外郭を設けて、これを保護しながら内部の外側に雄大な防御線を張ろうとする備えで、これを「総構(そうかまえ)」「総曲輪(そうくるわ)」と呼び、また総構が土塁と空堀で作られていることから「総堀」ともいわれた。

この小田原城総曲輪は、およそ北条三代・氏康の永祿年間(1568-1585)頃から作り始められ、上杉謙信、武田信玄の来攻の経験などを生かして次第に拡大され、五代氏置くの時、豊臣秀吉の小田城攻めがはじまる直前の天正十八(一五九〇)年早春に完成したものと考えられます。

この早川に遺構は、当時の小田原城南方外部の一部でその構造は二重遺構になっています。外部で数個の虎口(こぐち)(城の出入り口)や土塁、堀の接点など城郭上の弱いところは二重構造で固められています。早川口遺構はその好例です」

小田原宿感応寺の行方



小田原宿感応寺の行方

小田原市教育委員会発掘資料

小田原市の再訪を約束しながら、すでに五年の月日が流れた。その間、いろいろな情報を得ていたのだが、ここでは適当でないので発表することをひかえたい。平成五年十月、今度はカメラ持参で訪れ、まず早川口遺構付近で読経・唱題し、周辺に住んでいる人たちに聞き込みを始めた。

ちょうど、疎水近くの民家を訪ねて、話を聞くことができた。

「昔、この辺にお寺があったということは聞いていたが、名前は知らない。戦争前からこの辺（遺構）の土地は、所有者が転々としたらしく、昭和二十四年頃までは『りょう運亭』（りょうの漢字は不明）という旅館があったり、会社の寮が建ったり、その後、ようやく野村不動産という会社から、小田原市に譲渡されて現在に至ってる」
これだけのことは元感応寺の跡地は実際にわからない。著者は疎水に沿って、以前来た道とは逆に歩くことにした。五分程でやや広い道に出ると、小さな店でジュースを買うことにした。その日は十月にしては暑かった。そして、店番のおばあさんに同じ質問をすることにした。

「昔、この辺にお寺があったと聞いていませんか。感応寺といいますか」
おばあさんの答えははっきりしていた。

「実は私の息子が近くに住んでいるんだけど、そう十年前ぐらいかしら。まだ原野のような土地を住宅分譲するということで、不動産会社に申し込んで持っていたら、そこからたくさんの人骨が出てきたんですよ。」

そのあとは市の方で調べたらしいけど、いまはもう、すっかり住宅がいっぱいたってしまってますよ。」

話を辿ると、どうも早川口遺構入口から中へ進んで、左手高台の方を指すらしい。が、それでもまだ特定できず、また人骨はどうなったんだろうと思いつつも、写真を十数枚撮って、周囲を何度を見渡した。

そこからの壁であった。調査の方法を再考する必要を感じ、あともう少しのことで、小田原を去らねばならなかった。

そうしているうちに、著者は同年十月下旬、小田原宿感応寺紀行を、「法華宗教学研究発表大会」で披露する機会を得た。少ない調査資料から推論だけで発表することは危険であるのだが、今回は止むを得ず、資料の公開のみを主眼とし、了解を得た。

それから数日後、著者はある先輩の僧（沼津市妙泉寺原井慈鳳師）より、耳を疑う様な情報を聞いた。電話口で原井師は、「小田原市教育委員会発行の元小田原感応寺発掘資料集がある」と話し、著者は早速その資料集を貸りて、前後の関係を調べたのである。

この発掘調査資料は、小田原市教育委員会が昭和五十七年三月に発行したものである。正式名称は「感応寺址・小田原市文化財調査報告書第十二集」とある。調査団長は国学院大学考古学資料館学芸員、金子皓彦氏。調査墓発掘される。調査は昭和五十三年七月十六日から八月六日まで実施され、この資料に記載されている「明治十九年小田原市地形図」にも、同早川口に感応寺を見ることが出来る。

いずれにせよ、資料引用が多くなるので、全部紹介できぬが、この中からとくに重要と思われる部分を二、三紹介することとする。

一、明治二十二年小田原を離れて秋田移転一部の墳墓を同市妙経寺に改葬

「小田原甲十字四丁目蓮宗八品派感応寺者天文元年開創然現時燈相統不成依之今回秋田県羽後国由利郡平沢村移

小田原宿感応寺の行方

転再興因創立地来故住職拜禮中無縁者墳墓遺骨等当山改葬建設者也

千時明治元二歳十二月

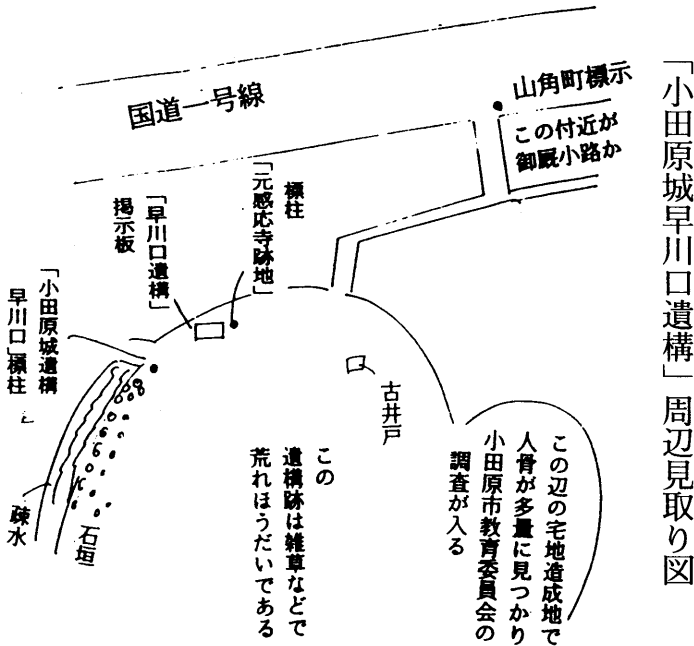
当山三十九世日大 花押

一、墓石は静岡県沼津市へ運ばれ、現在住職は秋田県能代市に住んでいる

一、小田原城周囲の寺院は、防衛施設ともて機能することが可能で、感応寺も自然の要害の様な役目をしていたと

思われる高台に位置していた

等々であるが、これ以上発表するまでには、まだまだ資料集の検討が必要で、また他の資料とも比較研究が求められるので、後日の調査とする。



明治以降の感応寺の足跡

ここで目を転じて、明治以降の小田原感応寺の足跡を辿ってみる。

先きの小田原市教育委員会の発掘資料では、秋田移転は明治二十二年とある。ところが、法華宗年表（P二〇八）によると、平沢感応寺は、

「明治年中、広受院日禱小田原感応寺を秋田県由利郡平沢に移転す、後に藤丸氏本荘市に再移転」

と、大正元年の記載があるが、年表で発表されている年月には困難がある。しかし、明治二十二年の移転を裏付ける様に、現在の秋田県由利郡平沢妙正寺の四天王、不動愛染像に、

「明治二十五年、平沢両前寺 高橋七五郎寄進 瑞隆院日淨代」

とある様に、明治二十五年すでに平沢にて移転復興して布教活動に入っていたと伺える。ただ、現在の仁賀保町平沢妙正寺が、直接移転後の小田原感応寺の系譜を受けついでものでないことははっきりしている。それでは、いまの妙正寺、詳しくは平沢家の後の妙正寺は、なぜ平沢（小田原）感応寺の明治二十五年寄進の四天王等の仏像を受け継いだのか。

平沢感応寺は明治三十五年になると、再度移転する。これが秋田県本荘市石脇の感応寺である。（藤丸家過去帳）この石脇感応寺の関係、藤丸哲哉師のことを述べてみたい。藤丸家過去帳によると、

「昭和八年五月十七日調

本荘町石脇妙子 元感応寺 哲哉

小田原宿感応寺の行方

感応寺は元相州小田原にあり光長寺末なり 明治三十年頃平沢に転じ明治三十五年七代目藤丸五兵衛の発願により大法寺先住宮川日浄と共力し本荘町石脇上表老沼に同寺号を将来して堂宇を建立したり 八代目興五兵衛、父の志を継ぎ宮川師を奉り同寺を経営したるも 大正八年二代目鏡(瑞照院)上人遷化後、寺門衰頹し、大正十一年当時の管理者田中日寿、遂に寺号を能代に移転せり

昭和四年五月一日興吉御(哲哉)地所を整理し、旧屋を修理増す

常光院日教上人

昭和四十二年八月三十一日寂

俗名 藤丸興吉郎(哲哉)寂

とあって、ここに登場する藤丸哲哉師は、元興隆学林教授で、平沢移転後から本荘市は再移転したときの外護者の子孫であることがわかる。法華宗年表(P三〇九)では、哲哉師は大正十四年、法華研究の為ドイツに留学し、昭和四年には「日隆聖人御一代記」を著わし、昭和四十二年八月三十一日八十一歳で亡くなっている。

平沢妙正寺は、元大法寺出張所(秋田県本荘市大法寺)として発足、開基妙正尼が昭和二十四年妙正寺と改称して今日に至るが、妙正寺は「神の湯」を経営し、当時哲師はその湯によく本荘市から通っていたらしい。本荘市石脇感応寺を閉鎖するについて、堂内の三宝尊、四菩薩、四天王等を妙正寺に寄進した可能性は高く、妙正寺蔵の四天王、不動愛染が平沢前寺の高橋某の寄進とあることから哲哉師が平沢妙正寺(当時は大法寺山出張所)に対し、特別な感情を持って仏像寄進等の行動に出たことはまちがいあるまい。

では、平沢感応寺は移転後、どこに所在したのであるか。寄進者名、平沢両前寺とあることから現在の仁賀保町

両前寺妙倉寺が感応寺跡地であろうと推測される。この妙倉寺の参道の両側に二つの題目名があることに注意が集まる。

安政六年己未四月

明治十年十月

本門

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

品

南無日蓮大士

村中安全

妙創寺の開創は昭和二十四年であることから、この二つの題目石をどう判断すればよいか。

ここまで記述した中で、とくに大事な点は小田原宿感応寺の所在場所が確認できたこの無縁塔、あるいは同市教育委員会の調査資料の解折等課題として残る。

当初の研究課題は「明治時代の新寺建立由来」であった。明治新政府の宗教政策を調べているうちに、自然、小田原感応寺の行方が変わってしまった。

法華宗年表

(P八六)

享祿年中、光長寺第七世日建（にちごん）小田原に
宝塔山感応寺を創立

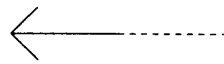
(P八七)

天文二年十一・八

光長寺七世日建寂、小田原感応寺開基 華実抄を著
(光過)

今回の調査による年譜

天文二年（一五三三）十一月光長寺末日建、宝塔山感
応寺を開山（相模風土記、村里部足柄下部卷之三）



宝塔山感応寺第二十六世一妙院日領大徳、天保四年八
月十五日寂

(能代市感応寺所持の宝塔山感応寺過去帳の歴代は第
二十六世で終わっている)

明治二十年十二月小田原感応寺、秋田県平沢に移転
(小田原市妙経寺内無縁塔に刻まれてある)

P二〇八

大正元 明治年中広受院日禱、小田原感応寺を秋田
県由利郡平沢に移転す後に藤丸氏本荘市に再移転
(寺記)

P二二三

大正九、十二・二十九

秋田県本荘市感応寺 近藤文応寺を能代に移転し、
新たに南中山感応寺とし開基となる

(寺記)

P二一六

大正十三年、六月六、七日 秋田県能代感応寺(近
藤文応) 入仏慶讃法要を修す(宗記)

小田原宿感応寺の行方

明治二十五年十月十三日、平沢両前寺高橋七五郎、平
沢感応寺に四天王・不動愛染像を寄進、移転中興瑞隆
院日浄代(現在・秋田県仁賀保町平沢妙正寺に格護さ
れてある)

明治三十年正月十三日寂、平沢感応寺三世広受院日禱
大徳(感応寺過) 同年平沢感応寺に移転(藤丸家過去
帳)

大正十一年

田中日寿、石脇感応寺を能代に寺号移転す

(藤丸家過去帳)